新潟県小中学校教頭会
会報
No. 196

目　次

●副会長挨拶 …… 1
●関ブロ大会提言者の声 …… 2
●関ブロ大会参加者の声 …… 3
●特集 …… 4～5
●郡市教頭会ネットワーク …… 6
●教育懇談会報告 …… 7
●随想 …… 8

「幸せな子」を育てるのではなく どんな境遇に置かれても「幸せになれる子」を育てる

新潟県小中学校教頭会
副会長　竹　垣　雅　彦
（長岡市立表町小学校）

今年度も残すところ１か月となり、１年間を振り返る時期となりました。夏には、１年送りとなった東京オリンピック、パラリンピックが開催され、多くの感動をもらいました。しかし、８月30日には、新型コロナウイルス感染症対策として県内全域を対象とした「特別警報」が発令されました。コロナ禍で子どもにどんな力を付けさせるべきか、そのために何をすべきか、優先順位は何か、常に考えながら教育活動を創ってきたそんな一年となったのではないでしょうか。

当会では、10月29日（金）に第57回新潟県小中学校教頭会研究大会　第13回ブロック別研究大会をオンラインによる新しい形で開催し、大きな成果を上げることができました。心から感謝申し上げます。主管となられた郡市教頭会の皆様におかれましては、初の試みにも果敢に挑戦し、サブテーマ「夢・志をもち、他者と協働しながら未来を拓く子どもを育む学校づくり」に基づいて研究を進めていただきました。大変ありがとうございました。

さて、冒頭の東京オリンピック、パラリンピックですが、皆様は、どのシーンが心に残っていますか。

私は、競泳の池江璃花子選手が出場した女子4×100Mメドレーリレー決勝が特に心に響きました。記録は３分58秒12。メダルには届きませんでしたが、堂々の８位入賞でした。池江選手は大粒の涙と笑顔で「一度は諦めかけた東京五輪だったが、リレーメンバーとして決勝の舞台でみんなで泳ぐことができたのは本当にうれしかった。この数年間は本当につらかったし、人生のどん底に突き落とされた。ここまで戻ってくるのはすごく大変だった。戻ってこられてうれしい。」とコメントしています。白血病の病魔と闘い、トレーニングを積み重ね、代表選手入りした池江選手。その間の悩みや苦しみ、痛みは、いかに大きかったか、想像し難いことだと思います。

オリンピックの延長が決まった2020年７月、次のスピーチをしています。「（一部省略）思っていた未来が、一夜にして、別世界のように変わる。私も、白血病という大きな病気をしたから、よく分かります。それは、とてもきつい経験でした。そんな中、救いになったのは、たくさんの医療従事者の方に支えていただいたことです。今日、ここから始まる一年を単なる延期ではなく「プラス１」と考えることは、未来志向で前向きな考え方だと思います。ただ、一方で思うのは、逆境からはい上がっていく時には、どうしても、希望の力が必要だということです。希望が、遠くに輝いているからこそ、どんなにつらくても、前を向いて頑張れる。私の場合、もう一度プールに戻りたい。その一心でつらい治療を乗り越えることができました。世界中のアスリートと、アスリートから勇気をもらっているすべての人のために、一年後の今日、この場所で、希望の炎が、輝いていてほしいと思います。」

私たちは、「幸せな子」を育てるのではなく、どんな境遇に置かれても「幸せになれる子」を育てることが重要だと考えます。子どもたちが社会に出て働く頃は、ＶＵＣＡ（ブーカ：不安定、不確実、複雑、曖昧）がさらに進展し、エージェンシーが大切になってくると言われています。エージェンシーとは、「自ら考え、主体的に行動する力。持続可能な社会の創り手となる意欲」のことです。このエージェンシーを子どもたちが身に付けていくためにも、主体的・対話的で協働的な「思考・発信型」の教育への転換が求められています。

自分で考えて自己決定する、インプットだけでなくアウトプットもする、自律的に学んでいくという教育に取り組んでいかなければなりません。子ども同士が学び合い、互いにケアし合って、お互いを笑顔にしようと、相手を大切にする教育に取り組んでいきましょう。

関ブロ大会提言者の声

コロナ禍のリモートでも熱い大会に

小千谷市小中特別支援学校教頭会
増　井　　貴
（小千谷市立南小学校）

コロナ禍で影響を受けたものは数知れません。その一つがイベントの開催です。感染の状況に応じて時期、場所、収容人数、感染対策…など、通常考慮するには優先度の下がる対応について、気を遣うことを余儀なくさせられました。そして、学校現場でも泣く泣く延期・中止・規模縮小に追い込まれた行事がたくさんありました。

そして、ここにも一つ影響を受けたことがありました。第62回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会での提言者としての役割です。

提言者の役をいただいたのは、平成31年度。教頭職１年目の私には、目の前の業務もままなっていない状況下でした。当然、果たしてこの任務がやり遂げられるのか、期待半分、不安半分という心境でした。ただ、小千谷市立南小学校は、中学校と校舎を一つにした学校のため、通常の学校にはない特殊性がありました。そこで、どのような発表の割当がきても連携して活動している様子を示すことができる…と考えていました。

そして、知らされた発表割当は「教育行財政に関する課題」というもの。これには、多少困惑しました。なぜなら教育行政・財政と当校の学校経営のつながりに明確なイメージがもてなかったからです。どのような具体的な内容で論が展開できるか悩む時期が続きました。しかし、心強かったのは教頭会の存在です。メンバーの皆様にレポートのご意見をいただいたり、質問を受けて自分の中で曖昧だったことが明確になったり、少しずつ内容がまとまっていきました。

私の提言した主題は、「継続的な連携による適正な予算執行の取組　～小中一体型学校の実践～」というものです。

まず行ったのは、小千谷市から割り当てられている予算の把握です。事務職員から情報をもらい、費目や割当額の把握をしました。ただし、初めての年は、そこに無駄や改善の余地があるのかどうかは二の次でした。次に、予算執行に関する中学校との連携の洗い出し。予算を交互に出したり、季節で出し方を変えたりなど、小中一体型の学校ならではのやり方がありました。その他、施設設備・備品の管理、共用状況の把握をしたり、小中連携のための会議を運営したりして実践を重ねていきました。

令和２年度になり、感染拡大で発表が延期になったことは、プラスに考えました。理解が及ばなかった業務に改善のメスを入れられると。例えば、令和３年度の予算要望については事務職員と熟考して調整を図ることができました。また、中学校の予算データを手に入れ、小学校との比較をして支払い方法を改善しました。この他、２つの行政支援事業の予算執行については、小中一体型学校の強みを生かし、話し合いを密にして充実した備品環境を整えることができました。

このようにして発表内容を充実させてきました。その過程で、市教頭会の研修会で何度も発表の練習をし、発表の仕方も洗練させてきました。あとは、発表を待つばかり。

発表の仕方は予想通りオンラインでした。むしろ、昨年の群馬大会が紙上発表になってしまったことを考えると、リモートで大会を開催しようとする千葉県の取組に感謝しかありません。

当日の発表会場は、自校の会議室でした。中越ブロック研修会の発表会場がメッセピアで、指導の先生や司会・記録・運営の先生方がいたことを考えると、なんとも寂しいものでした。しかし、ZOOMでパワーポイントの画面を共有して、無事発表することができました。その後、グループ討議の様子を見て回ったところ、各グループで自校の取組や提言内容について熱い意見交換が行われていました。指導の先生からは、「連携の成果が子どもたちの変容にまで言及できるように今後も実践を続けてください」と感想をいただきました。

最後に、今回の発表を通して、ご指導いただいた千葉県教育庁の先生、大会実行委員の皆様、小千谷市小中特別支援学校教頭会のメンバーに改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

関ブロ大会参加者の声

勤務校に合った働き方改革

長岡市三島郡小中学校教頭会
長谷川　正　人
（長岡市立越路西小学校）

第62回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会は、11月12日（金）、オンラインによる半日日程で開催されました。

大会の内容は、全体会はなく分科会ごとの開閉会式と２つの教頭会の提案発表とそれに対する協議、指導助言というものでした。私が参加した分科会では、新潟県小千谷市教頭会と千葉県船橋市教頭会があました。校種（小55・中27・特支２）が長岡市と同規模で、「地域・教育行政と連携した働き方改革」に焦点づけた船橋市教頭会の取組を、勤務校と比べながら、聞きました。

船橋市の取組を勤務校と比較してみます。

①ＳＳＳ（スクールサポートスタッフ）、ＩＣＴ支援員の継続的な配置と増員

当校では、ＳＳＳの配置が単年度で終了し、ＩＣＴ支援員は月２日の勤務で、どちらも十分とは言えません。そこで、職員の放課後の業務時間を拡大するために、長期休業日を数日減らして授業時数を増やし、その分、週の中日（主に水曜日）を全校５限下校にしています。週後半や次週以降の教育活動の準備の時間が増え、教育活動の充実と働き方改革の両立を図っています。

②外部対応電話の時間制限、欠席連絡等のメール化

県内の市町村でも実施されている取組ですが、欠席電話連絡や教育活動に対する問い合わせに対応することで、保護者の考え方や教育観、学校に対する要望や本音・不満など、保護者の理解や教育活動を見直す視点を得られることも多いです。小規模校の勤務校では、電話対応の時間制限や欠席連絡等のメール化は優先度が低いと考えます。

勤務校では、職員の平均時間外勤務時間は、毎年、県や市の平均を下回り減少傾向にあります。また、働き方改革に対する自己評価も年々上昇してきています。今回の研修会は、改めて、勤務校の働き方改革を振り返るよい機会となりました。

千葉大会に参加して

新潟市小中学校教頭会
齋　藤　潤　次
（新潟市立亀田東小学校）

第62回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会千葉大会は、11月12日に千葉市において、初めてオンラインで開催されました。

開会式では、本大会の研究主題である「未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり」、サブテーマ～夢と思いやりの心を持ち　新しい時代をたくましく生きる子供の育成を目指して～について、時代背景や学習指導要領の趣旨を受け、魅力ある学校づくりをしていくという千葉大会が目指す基調提案がありました。

分科会では、研究課題に基づいた12の分科会が開催され、私の参加した「子供の発達に関する課題」の分科会では、２つの提言発表がありました。

茨城県の「はたらき思いやりよく学ぶかわちっ子の育成」の発表では、教頭として、児童・保護者・教職員のもつ困り感に寄り添い、特別支援の視点を生かした支援についての提案がありました。物的・人的UD化を進め、外部機関と連携しながら特別支援の視点から子供・保護者・教職員を支援する教頭の役割について成果が述べられました。

もう一つは、千葉県の「地域と連携・協働して子供たちを育む学校づくり」の発表では、コロナ禍での地域連携の今後の方向性及び教頭としての役割についての提案がありました。地域連携の窓口として、地域と連携調整を図り、コロナ禍においての地域連携を総合的な視野で進めていくことの重要性について述べられていました。

どちらの発表も、教頭に求められる視点や役割について再確認でき、今後の学校運営に生かすことができる内容でした。

オンラインという令和の新しい関ブロ研究大会でしたが、各県の取組に触れることができ、充実した研修を行うことができました。

特集　GIGAスクール構想における取組紹介

１人１台のiPadが配備されて

糸魚川市教頭会
齋　藤　雅　彦
（糸魚川市立西海小学校）

糸魚川市においても、学校の高速通信網の整備が終わり、子どもたちに１人１台のタブレット端末（iPad）が配備されました。

当市では、教育委員会が契約し、以前からICT支援員が各学校を巡回し、ハードに関することはもちろん、先生方の研修（アプリの紹介やそれを使った授業の提案など）をしたり、子どもたちの指導場面にTTとして入ったりしていましたが、iPadが導入されてからは訪問回数が増え、職員の初歩的な疑問にも丁寧に答えていただいています。

当校では「２学期中に１回は持ち帰りを」目指して、11月の学習発表会（新型コロナ対策でいろいろ苦労はしましたが、何とか開催しました）に併せて『iPad保護者説明会』を行いました。

iPadは市からの貸与品です。家庭に持ち帰った際には保護者の責任のもとで使用します。きまりや申し合わせなどの説明はもちろんですが、その自覚を持っていただくために開催いたしました。前述したICT支援員を講師に、GIGAスクール構想の目的や概要、糸魚川市のICT教育の現状などの話をしたりするとともに、使用時間制限をかける「スクリーンタイム」の設定を直接やっていただいたりしました。

予定が合わずに欠席された保護者がほんの数人いましたが、その方々も後日、来校いただき、すべてのご家庭に、同じ話を聞いたり、同じ設定作業をしたりしました。

保護者の中には、タブレット端末を触ったことがない方もいましたので、有意義な時間になったのではないかと考えています。

職員のICT指導力の格差や家庭の通信環境の整備など、まだまだクリアしていかなければならない大きな課題が山積していますが、市内の他の学校と手を取り合って、一つ一つ乗り越えていきたいと思います。だって、せっかく１人１台のiPadが来たのですから。

十日町市･津南町における GIGAスクールの取組状況

十日町市･中魚沼郡小･中学校教頭会
伊　藤　貴　史
（十日町市立十日町中学校）

十日町市と津南町のGIGAスクールは、本年度より本格的に始動しました。十日町市の小学校にはiPadが、十日町市の中学校と津南町の小中学校にはWindows搭載のタブレット型PCが配備されています。津南町では、ほとんどの小中学校が家庭への持ち帰りを開始しています。十日町市では、12月に、全小中学校で家庭への持ち帰りの練習を２回実施しました。現在は、持ち帰りの本格的な実施に向けて、各家庭のインターネット環境の把握に努めています。

ICTを活用した実践も盛んに行われています。「学びの軌跡を可視化したり、共有したり、蓄積したりするのに有効である」「生徒の興味や関心が高まり、主体的な学びにつながっている」というような成果も報告されています。また、授業だけではなく、毎日の健康観察や各種アンケートをICTで実施している学校もあります。回答時間が短縮でき、結果が即座に集計されたり、グラフ化されたりするなどの効果が得られています。保護者からも、「アンケートに回答しやすくなった」というような感想が寄せられました。

一方で、課題も明らかになってきています。ICTの活用の頻度が、個々の職員のスキルに大きく左右される点や、職員が腰を据えて研修に取り組むことが難しい点などが挙げられます。ICTの活用が授業の目的になることを懸念する声も聞かれています。また、保護者を対象としたアンケートでは、破損や汚損への対応、長時間の使用やいじめなどにつながる不適切な使用などを心配する回答も少なくはありませんでした。

今後のGIGAスクールの推進に当たっては、こうした課題の解決を念頭に置くことが重要だと考えます。教頭として、物理的な環境整備はもちろんのこと、職員がスキルアップを図っていけるような環境を整備したり、保護者の声に丁寧に対応したりしていきながら推進を図っていきたいと考えます。

特集　GIGAスクール構想における取組紹介

南魚沼市のGIGAスクール構想に向けた取組

南魚沼郡市教頭会
中　村　　周
（南魚沼市立上田小学校）

南魚沼市では、令和２年度中から、市と教職員で組織する「情報化推進委員」が中心となり、GIGAスクールマニュアルや、ガイドライン作成など、GIGAスクール構想に向けた準備を始めた。また、同委員の一部で構成する「アプリ選定委員」が中心となって各校で導入したいアプリの希望を吸い上げ、端末にインストールする準備を進めてきた。

そして、令和３年８月に一人一台端末が全ての小中学校で配備された。９月には、実際に端末を使うことで見えてきた課題を共有するため、市教委が中心となり、課題検討会を行った。すると、フィルタリング等のシステムの整備やアプリの使い方についての研修会が必要だということなどが分かった。市教委や管理業者が対応できることについては、すぐに対応し、さらに使いやすい環境となった。

９月からは、随時、アプリの使用方法に関する研修会やGIGAスクール推進のための研修会が行われた。いずれの研修会もZoomを使うことで感染症拡大のリスクを下げるとともに、勤務校において自由に参加することができた。

１月現在、端末の持ち帰りについて準備を進めている。Wi-Fi環境が無い家庭には、市がネット環境構築に向けた対応を検討し、コロナウイルス感染拡大による休校など、不測の事態でも、児童生徒の学びを保障できるよう準備をしている。

他の市町村に比べ、動き出しは遅かった南魚沼市ではあるが、その分、他の地域の先行的な実践を取り入れやすいという面もある。今後も情報化推進委員会を中心にGIGAスクール実現に向けた取組を進めていきたい。

GIGAスクール構想の実現

佐渡市中学校教頭会
岩　﨑　浩　史
（佐渡市立金井中学校）

1　はじめに

佐渡市では、令和３年４月に島内全小中学校にタブレットが整備された。当校でも活用のための環境整備と効果的な活用に取り組んだ。

2　取組の実際

(1)　環境整備

①　校内

ア　生徒用タブレットの管理番号の割当、初期設定及び個人パスワードの管理を行った。

イ　自校版タブレット活用ルールを作成して教職員で共通理解を図り、家庭に周知した。

ウ　ＩＣＴ支援員を招聘して全体研修や個別研修を実施し、学校生活、教科での活用方法を検討した。

②　家庭（保護者）

ア　タブレット使用の案内と教育用クラウドサービスを利用する際の個人情報に関する同意を得た。

イ　利用環境調査と通信試験を行い、Wi-Fi環境のない場合は、テザリングによる通信方法を説明して全家庭が通信できるようにした。

(2)　活用

①　教科・領域

ア　実験結果を撮影し、みんなで共有

イ　級友の意見に対するコメント入力

ウ　アンケート結果の集約

エ　運動場面の動画撮影

オ　観光資源を録画撮影してプレゼン作成

②　学校生活

ア　毎日の健康観察を実施

イ　生徒・保護者アンケートの回答

ウ　長期休業中の生活の様子を記録

3　効果と課題

効果的な活用ができた。活用推進に向けてICT環境整備、職員の知識技術向上が欠かせない。

郡市教頭会ネットワーク

見附市教頭会
山　田　好　一
（見附市立今町中学校）

見附市教頭会は、小学校８校、中学校４校、特別支援学校１校の計13校の会員で構成されています。顔がよく見える利点を生かし、教頭同士が遠慮なく情報共有と情報交換、意見交換を行うことができ、業務の推進に役立てることができます。

見附市教頭会として特徴的な研修は、年に２回行われる「移動教頭会」です。市内の学校で教頭会を開催します。通常の教頭会よりも１時間程度早めに集まり、会場校の校長先生より講話をしていただきます。また、当該校を見学し各校の特色ある教育活動を紹介していただくことも行っています。管理職として意識をしていかなければならない事を講話していただき、各学校の特色を生かした教育活動を紹介してもらい、それらを自校の教育活動に生かすことのできる、大変有意義な研修となっています。

他に、今年度は、校長会と合同で講師を招聘した「合同研修」を行いました。研修を通して新たな気付きが生まれ、子どもたちや教職員のために、何をすべきか考える貴重な学びの場となりました。また、事務職員部会と合同で行う「合同研修」も行いました。財務管理や業務改善の各校の工夫を学び、有効な手立てを事務職員と一緒に考えました。財務管理も働き方改革も、管理職や担当者のみが推進するのではなく、全職員が「やらなければ」という意識をどの様に持たせるかが大切だということが分かりました。今後、意識して実践していこうと思います。

そして、定例の教頭会では、小グループに分かれて研修を深めました。具体的には、次のような内容が研修のテーマとなりました。「コロナ禍での行事等の持ち方」「GIGAスクール構想について（ICT活用方法・使用ルール・職員のスキル等）」「各校のSDGｓに関する実践紹介」「選択研修（小中、小小、中中連携・特別支援教育・防災教育）」等になります。感染症予防を行いつつ、見附市が推進する「共創郷育」をどのように進めていくのか、さらに、令和３年度ならではのテーマが見えてくる研修でありました。

教育課題として喫緊の課題が絶えない昨今ではありますが、顔が見える利点を生かしながら、見附市の子どもたちのために、一つ一つの課題に見附市教頭会として一丸となって、一歩ずつ歩みを進めていきたいと思います。

佐渡市小中学校教頭会
椎　　一　夫
（佐渡市立河崎小学校）

佐渡市の小中学校教頭会の会員数は、特別支援学校、中等教育学校を含め、全34名です。この内、半数以上の会員は、島外からの赴任となっています。

佐渡市の小中学校教頭会では、２年ごとに主幹を入れ替えており、今年度は中学校が主幹となって活動しています。

今年度の佐渡市小中学校教頭会の主な活動は、10月下旬の「下越Ａブロック研究大会」参加と、11月下旬の「市小中学校教頭会合同研修会」の実施です。「下越Ａブロック研究大会」での提案発表は、中学校が行いました。佐渡総合教育センターを会場として、Zoomによるオンライで参加しました。「時間的にも、体力的にも有り難かった」という声がありました。一方で下越Ａブロック実行委員長は、当日の段取りや役割分担を確認するために、佐渡まで来られ、大変だったことと思います。

市小中学校教頭会合同研修会では、小中学校から各１名ずつ提案発表を行いました。協議会は３・４人で１組の小中会員混合班で行いました。校種の違いはありましたが、学校経営のアイデアや若手育成のポイントについて確認できました。また、協議会の後の指導講評においても、「この実践の成果と課題を各校で活かし、研究に厚みを持たせて欲しい」と御指導をいただきました。

この他に、小中学校別に研修会と広報誌の発行も行っています。小学校の研修は「危機管理研修」と、「教頭業務マニュアルづくり」です。マニュアルは新任教頭、及び、佐渡に新しく赴任した教頭が効率的よく業務を推進できるように考えたものです。中学校の研修は、「管理運営研修」と先に紹介した「下越Ａブロック研究大会の準備」です。各校での実践データーを持ち寄って提案内容を検討したり、リハーサルを行ったりしました。

今年度もこのような取組を行い、教頭としての力量の向上を目指して研修を深めることができました。

教育懇談会報告

令和３年度　教育懇談会の報告

新潟県小中学校教頭会
調査要請部長　平　出　　靖
（新潟市立東青山小学校）

日時：令和４年１月18日（火）15：00～16：55
会場：万代シルバーホテル
（教頭会役員はオンライン参加）
主催：新潟県小学校校長会・新潟県中学校校長会

１　教育委員会ごあいさつ

新潟県教育庁義務教育課　　課長 今井　渉　様
（新潟県教育委員会教育長
稲荷善之様のメッセージ紹介）

新潟市教育委員会学校人事課　課長 吉田　亨　様
（新潟市教育委員会教育長
井崎規之様のメッセージ紹介）

２　研究協議

協議題「GIGAスクール構想の推進」

話題提供　柏崎市立柏崎小学校　校長　竹田　充
柏崎市立第一中学校　校長　山田　智

○柏崎市小中学校長会が今後描くGIGAスクール構想の推進とは？ → 教育のICT化＋DXへ
○従来の学び(業務)の方法をICTに置き換える(＝ICT化)に加え、従来の学び(業務)のスタイル、在り方が変容する段階(＝DX）も目指す。
○SAMR(セイマー)モデルの導入
　S…代替　　紙に変えてデータで配信等
　A…増強　　双方向や全体で共有　情報量増大
　M…変容　　発想はあったが実現困難だった
　R…再定義　今まで想像できなかった
○SとAがICT化の部分。MとRがDXの部分。現在はS・Aを進めている段階。今後はゆっくりとM・Rへ進めていく。
○柏崎市の進捗状況
　・協働学習ソフト、個別最適化ドリルの活用
　・ICT支援員の活用
　・全教職員、校長会、市Ｐ連での研修
○校務におけるICT化からDXについて
　・小テストはタブレットで
　・教職員の打合わせ業務にタブレットを活用

協議

○モラル指導が課題。身の守り方の指導と併せて責任の取り方についても指導が必要。学校の指導だけでなく家庭の協力が不可欠である。
○新潟市のGIGA宣言の徹底を図っている。２つのルールを守らせ、間違うことを前提に段階的に指導を進めている。これからは、子どもをルール作りに参加させていきたい。

３　指導講評

新潟県教育庁義務教育課　　課長 今井　渉　様

○SAMRモデルを位置付けていくことで、校長や教員が、今いる位置や今後の方向性が分かる。大変良い取り組みであることを実感した。
○従来の授業では見られなかった、協働学習場面で瞬時に子どもの考えが把握できる、という学習用端末活用の良さを授業にどう生かすのかが今後の課題となる。
○ICT活用についての課題（情報モラル、指導力の向上等）の解消に向けて、県立教育センターの研修や実践アイデアシート等の資料、教育支援システムで配信している資料を活用してほしい。
○GIGAスクール構想の推進の原動力は教師の姿勢である。常に学び続けるという教師魂にいかに火をつけるかが大事である。教師の頑張りを励まし、価値付け、一層の展開を図ってほしい。

新潟市教育委員会学校人事課　課長 吉田　亨　様

○SAMRの「M」の段階へ進むのに、どういう活動がその可能性を秘めているかを協議することが大事になってくる。
○新潟市では情報活用能力について子どもの活用３段階（経験・トライ＆エラー・最適な手法）を設定し、支持的風土を基盤とした情報活用能力の育成を図っている。
○新潟市の実践で、単元を通して目的に応じたアプリを使いながら学習の幅を広げる学びの姿が見られた。探究のプロセスでより多くのデータを扱う中で、情報が精緻化され多様な視点で事象を検討していた。これが従来の学びの姿が変容している段階（Mの段階）と捉えている。
○働き方改革の視点から、校務におけるICT化からDXについては、今後ますます重要になってくるので実践を積み重ねてほしい。

随　想

2021年　記 録

上越市立清里中学校
荻　谷　隆　雄

１年延期のオリンピック、パラリンピックが開催された年として人々に記憶に残るであろう2021年。吹き出し風プラカードとともに、ロトのテーマがスタジアムに響いた時、日本のマンガアニメゲーム文化の一つの結実を見た。

「主観的に記憶される年月の長さは年少者にはより長く、年長者にはより短く感じられる」という説「ジャネーの法則」により、時間を年々短く感じるので、ここに2021年を記録する。

８月、佐賀大会へ参加して、フランシュシュの地巡りを画策したが、オンラインとなったため未達。帰りはCH郵便社のモデルと噂の京都文化博物館も狙っていた。

11月、韓国発の「軟体動物名を冠したドラマ」を視聴した。どうやら「南米の大河」と「網状映画館」はタッグを組んで、次のターゲットをCCCやGEOに定めたらしい。NHKもJBAも他人事ではない。

12月、21世紀から個人的に「今年の漢字」ならぬ「今年の一冊、記憶」を記録している。本は2020年から話題の「13歳からのアート思考」を選択した。かのカエルはまさにシュレディンガー准尉であった。記憶は「兄妹他鬼退治」「特殊高等専門学校バトル」「卍会ヒストリー」等が有力である。「小戸川TAXI」「手話王子」も秀逸だ。しかし、完結をみた二作品「ゲンドウ愛の物語」「パラディ島異聞」が忘れられない。特に後者の「ヒロインがある形で幕を引く」というラストは、1973年「牧村美樹」以来の新境地開拓で、私的にはこれを推す。

月曜日の朝の暖房は、立ち上がりに時間がかかり過ぎて困る。１時間が経過した。

「つくる」面白さ

五泉市立巣本小学校
波田野　伸　樹

10年前級外になり、長年の間に染み付いた「担任」のルーティーンや感覚から抜け出せず非常に落ち込んだ時期があった。ただ、級外生活に慣れてくると、そのポストの面白みを見出せるようになり、やりがいを感じるようになった覚えがある。

１つは、授業を作る楽しみである。勿論、担任時代にもあったが、立場の違った視点からの授業づくりも面白い。理科の授業の他にＴＴで算数の授業に入っている。私のミッションは低位の児童のサポートである。ただ、クラス全体を俯瞰してみると、有り余った能力を十分に発揮できなかったり、分かり切っていることの説明に退屈したりしている児童を見かける。放課後、担任の余裕になった機会を逃さず声をかける。ちょっとした「明日の授業攻略プチ会議」を開く。授業づくりって面白いなあとつくづく感じる。

集団をつくる楽しみもある。縦割り班活動を充実させ、高学年に対するあこがれや低学年に対する優しさは育まれてはいるが、日常の交流はというと、なかなか深まらない学校もある。

ちょっと手間を加えた鬼ごっこを数名の児童とやっているとあれよあれよと１年生から６年生までが参加してくる。数日付き合い、高学年に声をかけておくと、あとは放っておいても集団遊びが成立する。昔見かけた公園での風景が再現される。

職員室づくりや学校環境づくりもある。狭い職員室の導線を確保するのに頭を悩ますが、案外嫌いでもない。

こうしてみると、随分と仕事を楽しんでいる自分が見えてくる。

新潟県小中学校教頭会
［事務局］
県教頭会ホームページ
全国公立教頭会ホームページ
〒950-0911　新潟市中央区笹口２丁目７－17 和田ビル２F
E-mail　n-kyotoh@crest.ocn.ne.jp　TEL（025）244－8225
https://www.niigata-kyotokai.jp/　FAX（025）244－5060
http://www.kyotokai.jp/